

都市住宅の台所空間に関する研究
その1 台所平面図からの検討
(明治～昭和初期)

大阪市大 北浦かほる
大阪樟蔭女大 辻野増枝
大阪市大 多湖恭子

本研究は、明治～昭和初期における都市住宅の平面図から、台所空間がどのように変化してきたかを明らかにしようとするものである。聞取実例集、住宅懸賞図集、住宅専門書、建築雑誌等から約2,200戸を取り上げ、住宅平面における台所の位置、隣室とのつながり方等に注目して分析した。(資料は、関東方面のものが多い)

考察：分析の結果、次のような時代区分になった。

明治期	在来住宅型のもので、台所は、茶、間と隣接し、土間が広く、床土と段差があり、その一部は場床になっている。玄関脇に洋室を持つ和洋折衷型のものであれば、台所の隣に下婢室がある。洋館では、食堂があり、台所との間に配膳室又は食器室がある。	
大正期	I期 (2-10年)	いわゆる「中廊下型」の萌芽期であり、北側に台所、女中室、浴室が隣接し、廊下を介して茶、間がある。洋風の場合は、茶、間のかわりに食堂がある。
	II期 (11-15年)	新しい思潮としての「居間中心型」が提案される。「中廊下型住宅」は、さらに完成され、北側には台所を中心としたサービス諸室が、廊下の南側には居間、茶、間が配される。
昭和期	I期 (2-6年)	懸賞案や鉄道沿線のモデルハウスが多く、これらは、「居間中心型」の系譜を引く。台所が小さくなり女中室が姿を消す。「中廊下型住宅」は定着し、これらの台所にはすでに女中室が付いている。
	II期 (7-14年)	「居間中心型」と「中廊下型」の融合したもので、台所とサービスの諸室が、食堂、茶、間と隣接している。計画案よりも実際の図面が多くなる。
	III期 (15-18年)	戦時色が濃くなり、統制が出される。住宅規模の縮小に伴い、台所も最少限になり台所と玄関がつながっている。